

コロナ重症数、想定以上 救命率上がったが

… エクモ専門医が危惧 「拠点病院整備を」

2021年2月8日(月)配信毎日新聞社

[新型コロナウイルス](#)による死者の増加が止まらない。今月3日には全国で過去最多の120人の死亡が確認され、累計で6000人を超えた。[人工心肺装置「ECMO\(エクモ\)」](#)を使う医師で組織する「エクモネット」によると、重症者の救命率は上がっているものの、重症者数が爆発的に増え、現場の努力が追いつかない状態が続いているという。竹田晋浩代表は「医療の能力の限界を超えつつある」と危惧する。

エクモネットがまとめた全国約600病院のデータによると、コロナの重症患者に[人工呼吸器](#)を装着した場合、「第1波」(昨年2～6月)における救命率は74%だったが、「第3波」(昨年12月～今年1月21日)では79%に上昇した。

新型コロナは重症化すると肺に微小な血栓ができて呼吸機能が低下する特徴があるが、患者をうつぶせにして[人工呼吸器](#)を使うと血栓を避けて酸素を供給できることが、多くの治療を経験するなかで分かるようになった。そうした対応を重ねることで救命率が上昇しているという。

それに伴い、人工呼吸器を使用していた患者のうち、重篤化してエクモに移行するのは「第1波」では4人に1人だったが、「第3波」では12人に1人にまで減っている。こうしたデータは多くの病院でコロナの治療方法が定着してきたことを意味する。

しかし、症状が悪化しやすい[高齢者](#)の感染が増えたこともあり、全国の重症者は1月19日に初めて1000人を突破し、昨年12月2日の488人から約1カ月半で倍増。1日に100人以上が亡くなることも珍しくなくなった。重症者は1月下旬から減少し始めたものの、800人前後と高い水準のままだ。竹田代表は「救命率は上がっているが、『第3波』は重症患者の急増が想定以上のペースになっている」と指摘する。

重症者の急増は、病床の逼迫(ひっぱく)にもつながる。

竹田代表が院長を務める埼玉県川口市の「かわぐち心臓呼吸器病院」(108病床)は先月末、コロナの重症用のベッドを6床から10床に増やした。専門の医師4人と看護師ら約30人が交代で集中治療室(ICU)で治療にあたる。

だが、「1人退院してもその日のうちに次の患者が運ばれるような状態が2カ月間続いている。精神的な負担はかなりある」と竹田代表は話す。

重症者は回復までに2～3週間かかることも多い。重篤化してエクモに移行すれば、治療期間はさらに延びる。同病院によれば、昨年12月にエクモに2カ月間つながれた60代の男性が死亡した。男性は別の病院での投薬治療で効果が出ずに転院してきたが、耐性菌に2次感染しており、肺機能が戻ることはなかった。

病床を増やそうと、東京都は都立と都保健医療公社の計3病院をコロナ対応の重点拠点にする方針を示している。

竹田代表はこうした「拠点病院化」を東京だけでなく、首都圏で早急に進めるべきだと提案する。「民間病院への要請で大幅にコロナ病床を増やそうとしても、設備や人材面から現実的ではない。公立病院を拠点にしたほうが救える命も増える。重症者が大幅に減るにはまだ1カ月以上必要。警戒を解ける状況ではない」と訴える。